

## 中国体育系大学生の就職状況の課題とその背景に関する研究

王萌

丸山富雄

キーワード：体育系大学生，就職，中国

A research on employment situation and background of Chinese  
Physical education students

Wang Meng Tomio Maruyama

### Abstact

In recent years, there has a surge of Chinese graduates. While, the rate of employment among those young people has declined, particularly for the graduates of department of Physical Education.

In view of the above mentioned facts, the purpose of this research is to investigate fresh graduates from Shanghai University of Sport, Shanghai Normal University and East China Normal University. The survey shows that 15 percent of fresh graduates have not found a job yet and what's worse is the majority of the employed graduates have not found their ideal jobs. This phenomenon is mostly caused by both social and individual factors. China now is a sports power in the world, however, the development of its popular sports and social sports lags behind other developed countries.

Key word : Physical education students , Employment situation , China

## I. 緒言

### 1. はじめに

中国では、近年、飛躍的に大学生が増え、また雇用市場の競争も激化していることから、大学を卒業しても就職できない大学生が増えている。年々、就職率は低下傾向を示しており、大学卒業生の就職難は社会の大きな問題である。体育学院卒業生の状況も同様であるが、体育学院の中でも、特に運動訓練学院の卒業生の就職率は最も低い。

20世紀の終わりから、中国の高等教育は大きな拡大期を迎えた。中国教育部発表の統計公報によると、2008年、中国高等教育の規模は2900万人を超え、アメリカの高等教育人口より多くなり、世界一の高等教育人口を有する国になった。こうした高等教育の拡大は大学レベルだけではなく、大学院レベルでも募集は拡大倍増している。2013年、中国の大学卒業生は700万人となった。しかし、企業は即戦力になる経験者を優遇し、新卒者の就職は厳しい。たとえ就職できても平均的な月給は2千元（約2万7千円）前後。満足できる仕事が見つからず、安いアパートで共同生活する。大学を卒業しても就職できない中国の大学生、「啃老族（こうろうぞく）」や「蟻族（生活困窮者）」が各地の大都市に漂い、社会問題になっている。「蟻族」とは大学卒業生であるが、仕事が見つからない、あるいは仕事を持っていても収入が低いため、一人で住むような部屋を借りることができず、何人か集まって下町で一つの部屋に居住する人をさしている。

### 2. 上海の三大学卒業生の卒業時就職決定率（各年6月の最終結果）

実際に中国体育大学卒業生の就職内定率はどのくらいなのか。本研究の調査対象校の一つである上海体育学院の専攻ごとの過去5年間（2010年～2014年）の内定率（就

職内定者と進学予定者の比率）を次に示す（表 I-1 から I-3）。

因みに中国の体育学院（いわゆる体育専門のカレッジ）には、一般に「運動訓練専攻」「社会体育専攻」「体育教育専攻」（学科ではあるが、中国ではここでも学院の名称を使用）がある。それぞれの違いを紹介する。

運動訓練専攻は、高校までの運動レベルが国家2級以上の生徒が受験し、受験科目は体育専攻試験と大学独自の文化テスト（言語、英語、政治、数学）が課されるが、文化テストはかなり易しい。教員免許状は取得できない。大学四年間に、様々なスポーツ種目を学習する（バスケットボール、サッカー、水泳、バレーボールなど）。

社会体育専攻は全国試験で受験する。運動レベルの指定はない。教員免許状は取得できない。キャンプや伝統的な運動やスポーツを学習する。

体育教育専攻は全国試験および実技試験がある（試験の種目は短距離100m走、長距離800m走、跳遠）。運動レベルの指定はない。大学卒業時に、教員免許状が取得できる。大学四年間、体育教育、教育学、生理学、生物学、心理学などを学習する。

表 I-1 運動訓練専攻学生内定率

年度	卒業生	内定率%
2010	175	68
2011	180	71
2012	184	79
2013	185	73
2014	196	70

表 I-2 体育教育専攻学生内定率

年度	卒業生	内定率%
2010	182	76
2011	189	78
2012	192	74
2013	196	82
2014	193	81

表 I-3 社会体育専攻学生内定率

年度	卒業生	内定率%
2010	78	80
2011	72	81
2012	77	77
2013	78	84
2014	80	82

専攻ごとの5年間の平均は、運動訓練 72.2%、体育教育 78.2%、社会体育 80.8%であり、運動訓練専攻学生の内定率が最も低く、他の専攻と比較し6ポイントから8ポイントの差が見られる。

### 3. 研究目的

そこで本研究では、まず中国の大学生あるいは体育専門学生の就職難に関し、先行研究からその背景や要因について考察する。

次に、上海体育学院、上海師範大学、華東師範大学の体育学院卒業予定者の就職志望および就職先を調査し、その実態と課題を明らかにする。

それらの結果をとおり、今後の中国の体育系大学の発展すべき方向について言及したいと考える。

## II. 中国における体育専門学生の就職状況の背景

ここでは先行研究や各種統計から、中国の大学生、特に体育専門の学生の就職難の要因について、中国特有の社会的背景について考察する。

### 1. 人口的要因—需要と供給のアンバランス

近年やや成長が鈍くなったが急激な経済成長を続ける中国ではあるが、大学卒業年齢層の絶対的な人数の巨大さが大学生の就職難の背景の一つということはある。また、近年の経済成長に伴って、中国の人口は増加を続けている。これは、中国の人口が2015年に14億人を突破し、2020年には14億5千万人を突破したと推定されている。これは、中国の人口が2015年に14億人を突破し、2020年には14億5千万人を突破したと推定されている。これは、中国の人口が2015年に14億人を突破し、2020年には14億5千万人を突破したと推定されている。

### 2. 学生の希望職種と社会の需要とのズレ（マッチング）の問題

巨大な大学卒業生数ではあるが、大学への求人数は大学新卒者数を上回っている。しかし就職率が低いのは、求人と学生の志望との間にミスマッチが生じているからである。ミスマッチの主な原因は、大学生の就職先としての大都市および公務員や大企業

志向にある。大都市で就職することは、職場環境がよく、給料が高く、公共サービスが整備されていることを意味している。

### 3. 中国特有の戸籍保護という社会問題

中国教育部（教育省）弁公庁は2013年、「大学卒業生の就職情報サービス業務強化に関する通知」を発表した。社員を募集する企業の実態や求人情報を精査し、公平な就職環境を整えることが狙いである。性別・戸籍・学歴による差別を厳禁しようとするものである。

このことに表されるように、中国には実に様々な「中国式雇用差別」がある。学歴・戸籍・年齢といった「中国式雇用差別」の他に、中国の卒業生はさらに性別・容姿・身長・障害の有無・血液型・星座といったさまざまな雇用差別に直面しなければならない。これらのハードルは多くの卒業生にとって、就活の「障害物」になっている。

### 4. 特に運動訓練学生の過去の学習状況、すなわち中国におけるトップアスリート養成に関わる問題

運動訓練の学生は運動レベルが必ず2級以上を保有していることが入学の条件となっている。一般的な運動訓練学生は、地方の「業余体育学校」といわれるスポーツ専門学校出身者である。以前は、この体育学校は毎日休みなく、専門の運動訓練のみが行われていたようだ。そして自分の専門種目は得意だが、他のスポーツや教科の知識や教授能力が低い。現在は、午前中、教科教育を行い、午後から体育（すなわち彼らの専門）の授業というパターンが多い。

### 5. 安易な入学条件とカリキュラムの問題

体育学院の大学入試では運動訓練学生と体育教育学生の募集方法が違う。体育教育の学生は全国統一大学入試（7科目）に基づき選抜される。しかし運動訓練学院の学生は大学独自の試験を受ける。また、推薦入試制度も用意している。この対象となる学生

は、高校で、国際大会で3位以上の成績を獲得した者である。運動訓練の学生(省レベルで1級と2級の資格を持つ者)は全国統一大学入試ではなく、大学独自のかなり平易な数学、言語、英語、政治の4科目の筆記入試および専門の実技試験を受けることになる。したがって体育学院の中でも体育教育や社会体育の専攻学生と比べると、運動訓練専攻の学生は学業面では明らかに安易な入試となっている。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 文献研究

#### 2. アンケート調査

- 1) 調査時間：2014年6月
- 2) 調査対象者：上海体育学院 121人、  
上海師範大学 75人、  
上海華東師範大学 96人  
計 292人の体育学院4年生
- 3) 回収数(率)：  
上海体育学院 121(100%)、  
上海師範大学 69(92%)、  
上海華東師範大学 76(81%)  
計 266(92.3%)
- 4) 調査内容：就職内定状況、希望職種と実際の就職先 など
- 5) 分析方法：質問項目ごとに、男女および専攻別にクロス集計を行った。

#### 3. インタビュー調査

- 1) 調査時期：2014年6月
- 2) 調査対象者：体育学院卒業生4名  
(希望通りの就職者2名、希望通りではない就職者2名)
- 3) 調査内容：経歴、就職のために努力したこと など

### Ⅳ. 調査結果

#### 1. アンケート調査結果

##### 1) 就職内定率

#### ①大学別内定率

表Ⅳ-1 大学別内定率

	就職内定	進学	未定	その他	総計
上海体育学院	76 63.3%	19 15.8%	15 12.5%	10 8.3%	120 100.0%
上海師範大学	45 66.2%	14 20.6%	7 10.3%	2 2.9%	68 100.0%
華東師範大学	56 75.7%	12 16.2%	6 8.1%	0 0.0%	74 100.0%
計	177 67.6%	45 17.2%	28 10.7%	12 4.6%	262 100.0%

大学別でみると、華東師範大学が最も高く91.9%の学生が内定しており、次に上海師範大学(86.8%)、上海体育学院(79.15%)の順であった。また進学者は上海師範大学も最も多く20.6%の学生が進学予定となっている。

#### ②性別内定率

表Ⅳ-2 性別内定率

	就職内定	進学	未定	その他	総計
男	111 66.9%	30 18.1%	18 10.8%	7 4.2%	166 100.0%
女	66 68.8%	15 15.6%	10 10.4%	5 5.2%	96 100.0%
計	177 67.6%	45 17.2%	28 10.7%	12 4.6%	262 100.0%

性別では大きな違いはないが、進学は男子の方がやや多いことが分かる。

#### ③専攻別内定率

表Ⅳ-3 専攻別内定率

	就職内定	進学	未定	その他	総計
体育教育	48 68.6%	13 18.6%	7 10.0%	2 2.9%	70 100.0%
運動訓練	91 64.5%	25 17.7%	15 10.6%	10 7.1%	141 100.0%
社会体育	38 74.5%	7 13.7%	6 11.8%	0 0.0%	51 100.0%
計	177 67.6%	45 17.2%	28 10.7%	12 4.6%	262 100.0%

専攻別では社会教育専攻の就職内定率が高もっとも高く、体育教育、運動訓練の順で、それぞれ約5ポイント近くの差がみられる。進学は体育教育専攻、運動訓練専攻の約18%の学生が予定している。運動訓練専攻学生は17.7%の学生が進路先未定やその他となっている。

#### 2) 大学入学時の就職希望職種と実際の就職先

##### (1) 入学時の就職希望職種

##### ①性別比較

表Ⅳ-4 入学時の就職希望職種（性別）

	プロ選手	大学教師	小学校教師	中学校教師	高校教師	公務員	企業社員	自営業	その他	総計
男	1	37	31	16	31	11	21	8	10	166
	0.6%	22.3%	18.7%	9.6%	18.7%	6.6%	12.7%	4.8%	6.0%	100.0%
女	1	18	13	12	16	8	12	10	7	96
	0.0%	18.8%	13.5%	12.5%	16.7%	8.3%	12.5%	10.4%	7.3%	100.0%
計	2	55	44	28	47	19	33	18	17	262
	0.4%	21.0%	16.8%	10.7%	17.9%	7.3%	12.6%	6.9%	6.5%	100.0%

②専攻別比較

表Ⅳ-5 入学時の就職希望職種（専攻別）

	プロ選手	大学教師	小学校教師	中学校教師	高校教師	公務員	企業社員	自営業	その他	総計
体育教育	8	12	12	20	9	4	4	5	70	
	0.0%	11.4%	17.1%	17.1%	23.6%	7.1%	5.7%	5.7%	7.1%	100.0%
運動訓練	1	42	29	15	19	11	14	9	5	141
	0.7%	29.8%	17.7%	10.6%	13.5%	7.8%	9.9%	6.4%	3.5%	100.0%
社会体育	1	55	44	28	47	19	33	18	7	51
	0.0%	9.8%	13.7%	2.0%	15.7%	5.9%	29.4%	9.8%	13.7%	100.0%
計	1	55	44	28	47	19	33	18	17	262
	0.4%	21.0%	16.8%	10.7%	17.9%	7.3%	12.6%	6.9%	6.5%	100.0%

入学時の将来の希望職種は、全体では大学教師（21%）が最も高く、次に高校教師（17.9%）、小学校教師（16.8%）、企業の社員（12.6%）、中学校教師（10.7%）の順であった。

男女で大きな違いは見られないが、大学教師は男子が、中学校教師および自営業では女子が男子よりもやや多い。

専攻別では、専攻の教育目標と関係していると思われるが、大学教師は運動訓練、中学や高校の教師は体育教育、企業の社員は社会体育専攻の学生が特に多い。

(2) 就職先

①性別比較

表Ⅳ-6 入学時の就職希望職種（性別）

	プロ選手	大学教師	小学校教師	中学校教師	高校教師	公務員	企業社員	自営業	その他	総計
男	2	2	39	10	23	2	24	4	2	108
	1.9%	1.8%	36.1%	9.3%	21.3%	1.9%	22.2%	3.7%	1.9%	100.0%
女	4	17	7	9	19	4	17	1	2	86
	0.0%	6.1%	25.8%	10.6%	19.7%	9.1%	24.2%	3.0%	1.5%	100.0%
計	2	6	56	17	36	8	40	6	3	174
	1.1%	3.4%	32.2%	9.8%	20.7%	4.6%	23.0%	3.4%	1.7%	100.0%

②専攻別比較

表Ⅳ-7 入学時の就職希望職種（専攻別）

	プロ選手	大学教師	小学校教師	中学校教師	高校教師	公務員	企業社員	自営業	その他	総計
体育教育	1	1	18	7	12	7	2	2	48	
	2.1%	2.1%	37.5%	14.6%	25.0%	0.0%	14.6%	4.2%	0.0%	100.0%
運動訓練	1	9	30	9	19	4	17	1	2	88
	1.1%	5.7%	34.1%	10.2%	21.6%	4.5%	19.3%	1.1%	2.3%	100.0%
社会体育	0	0	8	1	5	4	16	3	1	38
	0.0%	0.0%	21.1%	2.6%	13.2%	10.5%	42.1%	7.9%	2.6%	100.0%
計	2	6	56	17	36	8	40	6	3	174
	1.1%	3.4%	32.2%	9.8%	20.7%	4.6%	23.0%	3.4%	1.7%	100.0%

就職内定者の就職先は、全体では小学校教師（32.2%）、企業の社員（23%）、高校教師（20.7%）が多い。男女別の比較では、小学校教師で男子が、大学教師と公務員で女子の比率が高くなっている。

専攻別では、希望職種同様、大学教師で運動訓練、小・中・高校教師で体育教育、企業の社員で社会体育の専攻学生の就職が多く

なっている。

(3) 希望職種と内定先とのギャップ

①性別比較

表Ⅳ-8 希望職種（性別）

	希望どおり	どちらともいえない	希望どおりではない	総計
男	48	29	30	107
	44.9%	27.1%	28.0%	100.0%
女	36	11	19	66
	54.5%	16.7%	28.8%	100.0%
計	84	40	49	173
	48.6%	23.1%	28.3%	100.0%

②専攻別比較

表Ⅳ-9 希望職種（専攻別）

	希望どおり	どちらともいえない	希望どおりではない	総計
体育教育	22	8	17	47
	46.8%	17.0%	36.2%	100.0%
運動訓練	41	25	25	88
	46.6%	28.4%	25.0%	100.0%
社会体育	21	7	10	38
	55.3%	18.4%	26.3%	100.0%
計	84	40	49	173
	48.6%	23.1%	28.3%	100.0%

内定先は希望職種であったかという問いに関しては、全体の約半数（48.6%）が希望どおりと回答したが、28.3%は希望どおりではないという回答であった。

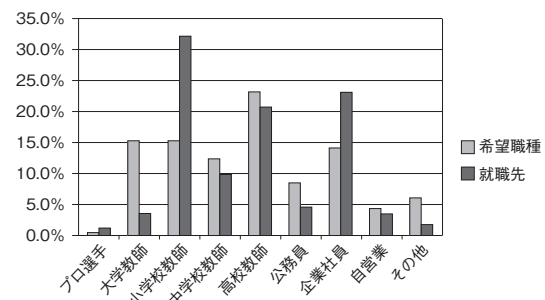
男女別でみると、女子の希望どおりの回答が高く、男子とは10ポイント近くの差があった。また専攻別では、社会体育専攻学生は希望どおりの回答が高く、逆に体育教育学生は希望どおりではないという回答が高く、ここでもそれぞれ10ポイント近い差となった。

③職種別にみたギャップ

ここでは実際に就職内定した学生の入学時の希望職種との内定職種のギャップを比較した。

表Ⅳ-10 希望職種と内定職種

	プロ選手	大学教師	小学校教師	中学校教師	高校教師	公務員	企業社員	自営業	その他
希望職種	0.6%	15.3%	15.3%	12.4%	23.2%	8.5%	14.1%	4.5%	6.2%
就職先	1.1%	3.4%	32.2%	9.8%	20.7%	4.6%	23.0%	3.4%	1.7%



図Ⅳ-1 希望職種と内定職種

希望した職種と実際の内定職種の差では、希望どおりではなかった職種は大学教師が最も大きく、その差は約12ポイントであった。また中学・高校の教師、公務員も2、3ポイントではあるが、実際には希望どおりにはなれなかった。逆に小学校教師と企業の社員は希望を上回る就職となっている。

## 2. インタビュー調査結果

### 1) 希望どおりの就職者の事例

#### (1) Aさん(25歳、女性)の事例

上海体育学院運動訓練専攻卒業。現在、上海市外国語学校体育教師。

Aさんは1988年に河南省安陽市に生まれ、家族は3人、子どもはAさん1人である。父親は河南省安陽市中国工商銀行、母親は河南省安陽市中国人民銀行に勤務し、比較的裕福な家庭に育った。1999年の小学校4年生から卓球の訓練を開始する。毎日授業は8時から午後4時までであり、授業が終わるとすぐに卓球の訓練を始め、約2時間練習を行った。小学校時代の学業成績は良く、また卓球も上手であった。卒業後、安陽市内の中学校に入学するが、そこで卓球の技量が認められ卓球の選手となった。そして翌年の2001年、上海市尚徳試験中学校に再入学した。この中学校は上海市の重点中学校である。毎日夜7時から9時まで、また週末を学校の卓球部で練習した。週の勉強時間は大体50時間、練習時間は18時間ぐらいであった。高校は上海市南汇中学校に入学したが、高校では授業科目が非常に多くなり、練習時間は少なくなった。しかし2006年、高校2年生の時、上海市の高校卓球リーグ戦で団体優勝し、さらに2007年の上海市南汇区卓球試合で優勝した。運動レベル2級となる。

2008年6月、高校を卒業し、9月から上海体育学院運動訓練院に入学した。大学1年

生からの希望の就職先は体育教師であった。4年生の10月から12月まで、大学の卓球コーチの推薦で上海市外国語学校でインターンシップを行い、2012年5月にこの学校への就職が内定した。

#### (2) Bさん(25歳、男性)の事例

華東師範大学体育学院社会体育専攻卒業。現在、上海華夏銀行社員。

Bさんは1989年に浙江省無錫市に生まれ、家族は3人、子供はBさん1人である。父親は本人が中学生の時に亡くなっている。母親は一般企業の社員で、家庭的にはあまり恵まれていなかった。2002年6月、小学校を卒業し地元の中学校に入学するが、すぐに退学し、無錫市少年業余体育学校に入学している。専門はテニス。2002年7月からテニスの訓練を開始する。文化的な授業は毎週月、水、金曜日の3日、8時から12時まで3回で、内容は、国語、英語、数学の3科目だけである。一方、テニスの訓練は毎日3回、朝7時から11時30分まで、午後1時30分から5時まで、夜7時から9時までであった。休みの日は日曜日だけであった。2005年5月浙江省無錫市内運動会男子大会(12歳-16歳組)で第2位の成績を収める。Bさんは省レベルのチームに入り、国家登録の選手になる。2007年全国青少年テニス大会第3位を獲得し、運動レベル1級となった。彼は健康や身の周りのことにも無関心で、想像を絶するほど過酷な訓練をもいとわなかった。特別な事情がない限り、家に戻ることも親が面会に来る事も禁じられていた。Bさんは自分の健康と人生を代償にして、金メダルに賭けてきた。しかし、金メダルを取れる人はほんの一部であり、極めて少ない。

そして、2008年3月、大学入試のためにテニスの訓練をやめた。この頃にはテニスは嫌いになっていたという。猛勉強の末、Bさんは華東師範大学体育学院に合格するこ

とができた。将来の一般企業への就職のため、大学4年間、一生懸命勉強し、計算機システム中級、全国英語4級の資格を取得している。2012年5月、上海華夏銀行の面接会に参加した。特技がテニスであり、頭取がテニス好きであったことも幸いし内定をもらう。実際、現在も銀行の代表として、上海市内の銀行の大会に出場している。3ヶ月の試用期間後、2012年9月から上海華夏銀行正社員となった。

## 2) 希望どおりではない就職者の事例

### (1) Cさん(25歳, 女性)の事例

上海師範大学体育教育学院卒業。現在、青島市人力资源部職員。

Cさんは1989年に山東省青島市に生まれ、家族は両親と本人の3人。父親は外科医、母親は一般企業の社員で、かなり裕福な家庭に育った。小学校から高校生まで青島市内の学校に通っている。スポーツは興味程度で、運動のレベルはもっていない。2008年9月に上海師範大学体育教育学院に入学した。大学時代はあまり勉強をせず、成績も中位であった。将来の就職の希望は小学校の教師であったが、インターンシップでは大学の推薦(約30%の学生しか推薦されない)が得られず、自ら探した青島市内のバドミントンクラブで行っている。2012年3月から上海市の就職採用が始まったが、市内の学校でインターンシップをしていないこと、戸籍も青島市であったため、小学校教師の採用試験には失敗した。その後、上海市内のスポーツクラブのコーチに内定したが、非正規雇用であったため、雇用期間1年ということ、給与も安いことから、内定を断っている。

両親も故郷に戻ることを勧め、ある意味、本意ではないが、6月の卒業式後に実家のある青島に戻る。しかし9月には、親の推薦、縁故で青島市人力资源部に就職できた。

現在は両親と同居できること、青島は上海に比べると生活環境や空気が良いこと、さらに人間関係も上海ほど複雑ではないのでストレスも少ないということで、生活に満足しているようである。

### (2) Dさん(24歳, 男性)の事例

上海体育学院運動訓練専攻卒業。現在、雲南省師範大学大学院1年在学

Dさんは1989年に江蘇省蘇州市に生まれ、家族は4人、父親、母親、Dさん、弟である。父親は中学校の数学教師、母親は自営業、現在弟は大学3年生である。2002年蘇州市内の中学校に入学するが、13歳の時に身長は178cmもあった。週末および学校の休業中には市内の少年業余体育学校のバスケットボールチームの訓練に参加していた。バスケットボールの練習は毎週2回、毎回3時間から4時間であるが、夏と冬休み期間はもっと増えた。高校生から学校のバスケットボールチームに参加し、バスケットの授業回数は毎週2-4回で毎回2時間であるが、技術水準の高い生徒については別に定めるとしている。高校2年生の時、週の大会で2位となり、運動レベル2級を取得する。2012年9月上海体育学院運動訓練専攻に入学する。入学時の希望する就職先は大学のバスケットボールの専門の教員であった。しかしDさんはほとんど勉強もせず、「大学は一日に数科目だけの授業で、週末は授業がない。試験は重要な所だけを勉強し、60点を取れば合格だ。中学・高校と比べ、大学はまるで天国のようだ。テストの圧力がないのだから、誰も真面目に勉強しようとしな」と話していた。大学時代は寮でゲームに熱中し、バスケットボールも熱心にはやらなくなった。普段は授業に出て講義を聞かず、試験前に徹夜で復習し、60点の合格ラインぎりぎりの点数を取る。これが彼の学習法だったが、成績はかなり下位であった。卒業を控え職探しの壁にぶつ

かった彼は、成績は企業が重視する人材の基準であることを意識した。彼は苦しみ、学習時間を浪費したことを後悔し始めた。

2012年1月、大学院の統一試験を受験したが失敗した。6月からは上海一兆韦徳クラブでアルバイトを始める。給料は毎月3000元(60000円)。しかし家賃が給料の半分ぐらいを占め、このままではだめだということで翌年の2013年1月、再度、大学院の全国統一試験を受験する。かなりレベルの低い雲南省の大学院に合格し、現在一年在学中である。今後の就職予定もない。

## V. 考察

### 1. 体育専門学生の就職状況の課題

ここではアンケート調査およびインタビュー調査の結果から、現在の中国体育専門学生の就職に関わる個人的な課題についてまとめる。

#### 1) 個人の努力

アンケート調査から、就職内定および大学院進学を合わせると対象者の85%の進路が決まっていた。しかし就職先は希望どおりでないと回答した者は約半数、また大学院進学も就職難、すなわち就職が決まらなかったから進学すると回答した者が20%を占め、卒業生の半数以上が希望どおりの進路に就けない現状が明らかとなった。

まずは中国の体育専門学生の課題として第一に、就職への明確な目的を持ち、そのための準備である在学中の勉強を怠らないことである。さらに運動訓練専攻の学生であれば特技のスポーツをさらに上達させることも必要である。

#### 2) 親の過保護とそれに対する甘え

アンケート調査から進路未定者の20%が実家に帰ると回答している。事例のCさんがその典型であるが、就職のための努力をあまりせず、うまくいかなければ親の世

話になる。Cさんのように豊かな家庭の出身者も多い。彼らには焦らず自分に合う仕事を探せばと、親が子どもを引き止める。また中国では子どもの自立より、いかに長く子どもといる時間を持つかを考える親も増えている。6人の大人(両親と祖父母)の期待や思いが集中する一人っ子ならなおさらである。それゆえに就職から逃避する学生も増える。留学や大学院への進学も厳しい競争社会から逃れる手段ともなっている。親や親戚からいい仕事を紹介してもらうのを待つ学生も増えている。

現在の一人っ子政策の中で育った大学生の中には、親の過保護とそれに対する甘えに慣れきってしまった学生も多く、このことも大学生が真剣に就職に向わないことの原因でもある。

## VI. まとめと今後の課題

### 1. まとめ

本研究では、中国の上海体育学院、上海師範大学、華東師範大学の体育専門の卒業生の就職状況と予定者の就職志望および就職先を調査し、その現状と課題を明らかにし、さらにその背景や要因について考察することを目的とした。

調査からは卒業予定者の約15%の学生が就職未定であること、また就職内定者も約半数が希望通りの職種ではないことが分かった。その原因には個人的な要因と社会的な要因があると考えられる。

個人的には、事例調査からわかるように、学生時代に就職への明確な目標とそのための準備を行う必要がある。大学に入学し、受験競争から解放され怠惰な生活をし、就職がうまくいかなければ親の世話になるという学生も多く、そのような学生は希望どおりの就職にはなかなか就けないことが分かった。

社会的な要因としては、人口的要因、希望



職種と需要のミスマッチ、戸籍による差別、また特に体育専門学生の場合には、トップアスリート養成の問題や大学入試やカリキュラムの問題も指摘できる。社会的な要因に関しては、個人的に解決することは困難であるが、個人的な努力で、少しでもこの課題を軽減する必要があると考える。

## 2. 提言

ここでは、今後の中国体育系卒業生の就職状況のための提言として、上海市の事例から次の点を指摘する。

### ①学生への提言

大学の4年間は、一生懸命勉強し、就職という大きなプレッシャーに立ち向かい、自分自身の競争力を高めるために、共産党への入党申請、公務員採用試験受験、各種資格試験受験、職場体験・インターンシップ参加、就職情報収集など、ありとあらゆる手段を講じ、就職に対応してほしい。

第二は親への依存。本研究の課題で指摘したことと矛盾するが、卒業生へのインタビューから、現状すなわち共産党体制下で職を得るためには、「親の七光り」が必要不可欠という。親にただ甘えるのではなく、自分でも努力し、また親や親せきからの支援も利用してほしい。

### ②大学への提言

入試、カリキュラムに関し、体育専門の学生、特に運動訓練の学生の入試をあまり安易にしないこと、また簡単に単位を取得できるような現状を改めることが必要である。大学関係者によると、大学の乱立で多くの大学が、学生の能力や資質には満足していないということである。優秀な学生を集め、就職対策も含めきめ細かな教育をしてほしい。またインターンシップは、現在、大学4年生の10月から12月に行われているが、就職活動に専念するためにも、その時期を少し早める必要もある。

### ③社会への提言

中国では戸籍などによる差別がある。政府は様々な差別の撤廃について取り組み始めているが、まだ履行されていない。一日も早く差別のない社会になるよう政策を進めてほしい。

また中国では都市と農村の格差は非常に大きい。大都市の学校は職場環境がよく、給料が高く、公共サービスが整備されていることを意味している。農村ではそれらの状況は全く違う。都鄙間の格差がなくなれば就職状況も大きく変わる。格差是正に向けた政府の取り組みに期待したい。

さらに中国は競技スポーツでは世界でトップになった一方で、大衆スポーツは世界の先進諸国と比べると、まだまだ遅れている。体育専門学生の就職対策においても、大衆スポーツの振興というスポーツ政策に力を注いでほしい。

## 3. 今後の課題

本研究では、中国の体育系大学生の就職状況の課題とその背景に関する研究を行ったが、時間の関係から上海市内の三つの大学の体育学生だけの実態調査となってしまった。しかも調査対象が三大学の体育教育、運動訓練、社会教育だけとなってしまった。今後、さらに地域を広げて調査を行う必要がある。

また、体育専門学生の就職状況に関する先行研究を収集したが、その先行研究は一部に限られてしまった。中国は広大で、また人口も多いことから全国調査は無理であるが、体育専門の卒業生の就職状況に関する各地域の調査研究が望まれる。

さらに今後の中国のスポーツの発展には、中国の内陸や農村の大学などの複数の事例を用いて検証することが課題である。

## Ⅶ. 引用・参考文献

- 1) 中国教育部発表の統計公報 2013年10月
- 2) 中国人民晩報 2013年5月3日
- 3) 中華人民共和国国家統計局 2012年
- 4) 上海市統計局 2012年
- 5) 中国人民網 2013年10月15日
- 6) 中国青年報 2012年6月28日
- 7) 中国教育部(教育省)弁公庁発表の統計公報 2013年3月
- 8) 中国新聞網 2014年5月22日
- 9) 笹井 善仁,「中国と日本におけるボール競技者養成体制の比較研究」 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集 Vol.13.2012.3